

○京田辺市は、京都府生産量の約1割を占める重要なナス産地だが、**担い手の高齢化**が進み、安定出荷を望む**市場の期待に応えることが困難**。

○このため、普及センターが京田辺茄子部会に「**田辺なす農家養成塾**」プランを提案。また、近年急増する新規参入者に対して「**インターンシップ制度**」を設置。

○その結果、**養成塾を36名が修了し、21名が新たに栽培を開始**。また、「**インターンシップ制度**」を活用し、**新規参入者1名が栽培を開始**。

具体的な成果

普及指導員の活動

1 支援体制の構築

- 担い手育成に向けた支援体制の構築
- 普及センター：塾企画、技術実習
- 生産部会：塾講師、農地提供
- JA：塾開催調整、広報による塾生募集
- 市役所：初期投資に対する補助事業
- 広域振興局（行政）：インターンシップ制度

平成22年～

■支援体制の整備

普及指導員の提案により、担い手育成には、技術習得から農地確保、資材準備など**一連の支援が必要なため、JA、市役所、広域振興局、普及センターによる支援体制を整備**

2 新規栽培者の確保

■養成塾により新規栽培者の確保に向けた技術支援がカリキュラム化できた。
（H22～27年度実績）

- ①塾の修了生 36名
- ②新規栽培者 27名



③担い手の世代交代

修了生が、高齢でリタイヤしたナス農家のほ場を借りて、栽培面積を拡大している。また、生産者の約1/3が塾修了生となっている（平成28年度実績）。

■田辺なす農家養成塾による技術習得

普及指導員の提案により現役の生産者が講師となり、実習と座学を行う「**田辺なす農家養成塾**」プランを開始

平成24年～

■インターンシップ制度による農地の確保

新規参入者が農地を確保し、栽培を開始できる事業を策定。新規就農者を訓練生に、訓練農地を確保できる篤農家を指導農家として、マンツーマンで1年間農業基礎技術を習得できる事業を策定、活用した。

3 新規参入者の定着

■新規参入者はインターンシップ制度により基礎技術の習得、優良農地が確保できた。

インターンシップ制度により新規参入者1名が就農



普及指導員だからできたこと

■栽培技術と補助事業の知識を持ち、生産者、関係機関との橋渡しができる普及指導員だからこそ、**担い手育成に向けた入塾から就農まで一連の支援を企画、提案できた**。

京都府

「田辺なす農家養成塾」プランによる産地支援体制の構築

活動期間：平成22年度～継続中

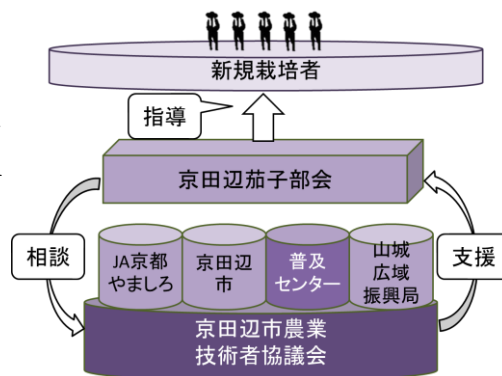
1. 取組の背景

京田辺市は夏秋ナスを約800t生産し、東果大阪市場を中心に大消費地へ出荷しており、京都府の生産量の約1割を占める重要なナス産地である。しかし、栽培農家は高齢化し、子供世代はサラリーマンというように後継者が減少し、昭和60年代の全盛期に比べ担い手が半減した。その結果、高品質なナスの安定出荷を求める市場の期待に応えることが難しくなっている。そこで、普及センターから「田辺なす農家養成塾」プランを提案し、関係機関と協働して取り組みを開始した。

2. 活動内容（詳細）

(1) 支援体制の整備

担い手育成には、技術習得から農地確保、資材準備等初期投資など栽培開始までの一連の支援が必要であるため、JA京都やましろ、京田辺市、山城広域振興局、普及センターで構成する「京田辺市農業技術者協議会」と京田辺茄子部会による支援体制を整備した。



活動体制

(2) 田辺なす農家養成塾による技術習得

普及センターは、新規栽培者が栽培技術を習得するため現役の生産者が講師となり、実習と座学を行う「田辺なす農家養成塾」プランを提案し、平成22年度から開始した。

京田辺茄子部会、JA京都やましろ、普及センターで実習と座学のカリキュラムを企画し、講師役の生産者が自らのほ場を提供し、技術実習を担当した。また、普及



田辺なす農家養成塾

センターがマニュアル、作業ビデオを用いた座学と栽培技術の実習を行った。

JA京都やましろは、日程調整や会場設定、実習時に使用する資材の準備、

広報誌による塾生募集を担当した。

(3) 塾生の修了から栽培開始までの支援

京田辺市は、塾生が栽培開始に必要な資材費等の初期投資を「京田辺市単独農業振興事業補助金」で補助し、新規栽培者の資材購入費用を支援した。

(4) インターンシップ制度による農地の確保

新規就農者を訓練生に、訓練農地を確保し、篤農家を指導農家として、マンツーマンで1年間農業基礎技術、地域の行事参加、農家生活を学べるインターンシップ制度を創設した。インターンシップ期間中に地元農家の信頼を獲得し、優良農地が確保しやすい環境づくりに役立っている。



インターンシップの様子

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 新規栽培者の確保

平成22年度から平成27年度までに「田辺なす農家養成塾」を36名修了した。このうち27名がナス栽培を開始し、高齢でリタイヤしたナス農家のほ場を借りて、栽培面積を拡大している。また、平成28年度は6名が入塾した。

(2) 新規参入者の定着

新規参入者はインターンシップにより栽培技術をはじめ農業基礎技術を習得できた。さらに、JA 京都やましろ、京田辺市が広報誌等でインターンシップの様子を地元へPRしたことによって、地域でその努力が認められた。その結果、新規参入者は地域の農家から優良農地を提供された。

4. 農家等からの評価・コメント

- ・ナス栽培は初めてだが、ほ場の準備から定植、栽培、収穫と一連の作業を勉強できてよかった（複数）
- ・実習をとおして農家が気をつける栽培のポイントを知ることができた（複数）
- ・田辺なす農家養成塾修了生は規模拡大に取り組んでおり、京田辺茄子部会を盛り立ててくれている（JA）

5. 普及指導員のコメント

京都府有数のナス産地の担い手不足が深刻化しており、京田辺市農業技術者協議会が一体となって取り組んだ。

さらに、京田辺茄子部会部会長が担い手育成に熱心であったこともあり、部会全体で田辺茄子農家養成塾を盛り立ててくれた。

その結果、平成28年度には塾を修了し実際にナス栽培を開始した人数は、部会全体の約1/3にのぼり、着実に担い手が育っている。この養成塾プランをより良くし、担い手の増加に結びつけてほしい。

(山城北農業改良普及センター 技師 成栗 祥太)

6. 現状・今後の展開等

田辺なす農家養成塾、インターンシップ2つの取り組みで、個々の事情に応じた幅広いナス担い手を確保する支援体制が構築された。

平成28年4月には京田辺市に茄子選果場が新設され、選果、箱詰めにかかる労働時間が短縮される。この余剰時間を有効活用しようと若手栽培者中心に栽培面積の拡大を図っており、面積拡大後も安定的な収量が確保できるよう肥培管理技術の支援が今後の課題である。